

アフロディシアスのアレクサンドロスにおける「善く生きること」

北海道大学 野村拓矢

1. はじめに

アリストテレスは、動物の諸感覚を序列づけるに際して二つの基準を用いる。一つ目は、単に「生きること」、すなわち、生存にとっての重要性である。この基準に照らした場合、あらゆる動物が有している触覚と、ある種の触覚としての味覚が他の感覚よりも重要とされる¹。もう一つの基準は、「善く生きること」にとっての重要性である。このことは、『感覚と感覚されるものについて』の以下の一節に明瞭に表現されている。

また、外部の事物を通じての諸感覚、例えば嗅覚や聴覚や視覚は、諸々の動物のうちでは、歩行能力のあるものに属するのであるが、一方で、それら嗅覚・聴覚・視覚を有する全てのものにとっては、生きることを見つけるために属する。……しかし、他方で、知（φρονήσεως）²をそなえるものにとっては、善く生きることのためにそれら嗅覚・聴覚・視覚は属する。（436b18-437a1）

ここでは、嗅覚・聴覚・視覚が、それを有する動物が単に「生きること」に寄与すると同時に、知をそなえるものの場合、それらが「善く生きること」にも寄与するとされている³。

アリストテレスは、倫理的著作において人間にとっての「善く生きること」を「幸福」と等しいと述べている⁴。したがって、この箇所は、特定の感覚は（少なくとも人間については）幸福に寄与するという主張として解することができる⁵。アリストテレスが「善く生きること」、すなわち、「幸福」の内実として何を想定していたかは直後の記述から明らかになる。

事実、それらの感覚は多くの差異を伝達し、これら多くの差異から、思考されうるもの（νοητῶν）や実践されうるもの（πρακτῶν）の知が魂のうちに生じる。（437a1-2）

この箇所では、特定の感覚が人間の「善く生きること」に寄与するのは、魂のうちに「思考されうるもの」と「実践されうるもの」の知を生じさせるた

めであるとされている。つまり、特定の感覚が人間の「善く生きること」に役立つのは、観想や実践に寄与するためであるとされている。

「善く生きること」、「観想と実践」そして「感覚」を結びつけるこれらテキストには、いくつか不明瞭な点がある。まず、視覚や聴覚といった特定の感覚が、観想知と実践知という全く異なる知のそれぞれの獲得に具体的にいかなる仕方で寄与するのかは、続くテキストからも明らかではない。また、このテキストにおける「善く生きること」、すなわち、「幸福」には観想と実践の両方が含まれているように思われる。しかしながら、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』X巻において観想こそが「完全な幸福」であるとし、実践を「二次的な幸福」に位置付け、実践に対する観想の優越を明確に説いている⁶。したがって、「善く生きること」における観想と実践の関係がいかなるものであるのかもまた、このテキストからは明らかではない。

同様の疑問に、古代におけるアリストテレス著作の最大の注釈者であるアフロディシアスのアレクサンドロスも直面していたと考えられる。アレクサンドロスはアリストテレス著作の整合的読解を試みた人物であるため⁷、これら疑問に対しても、アリストテレスに則して答えを提出していることが期待される。以下において、アレクサンドロスが以上の疑問に対していかなる見解を有していたかを考察することで、アレクサンドロスによるアリストテレス著作の整合的読解がいかなるものであったか、そして、その試みにおいて、アレクサンドロスがアリストテレス哲学のいかなる点を重視していたかを検討する。

2. アレクサンドロスの見解

アレクサンドロスは、上で引用した『感覚と感覚されるものについて』の一節に対して、注釈を残している。

確かにあらゆる感覚は、動物にとっては生存のために存しているのだが、知（φρόνησις）を受け入れられるものにとっては、諸感覚の一部は知にも寄与するのである。したがって、それらは……善く生きることのためにも存している。……視覚や聴覚を通じた把握と、把握される諸対象の間の差異は、実践と観想の始原であることは明らかである。というのも、可視的事物の間の差異は、我々を明るさと暗さ、つまり、昼と夜の概念へと導いてくれるものであり、これら概念から始めて、我々は昼や夜を創り出すことができるもの [=天体] を探求するからである。このこと

から万有やそのうちの事物に対する観想が生じ、プラトンの言うように、夜と昼を創り出すことができるこれらのものが生じるのを見て、我々は数の概念を有するのである。……しかしながら、目に映る星々の動きや大きさの差異もまたある。……これら差異は、星々の動きにおける規則性や永遠性の概念、そして、真なる大きさの探求に関する概念へと我々を導いてくれる。そして、星々の観察は第一原因の探求へも我々を導いてくれるものである。(10.26-11.23)

この箇所、アレクサンドロスは視覚がいかにして人間の観想に寄与するかを具体的に説明している⁸。まず注目したいのは、アレクサンドロスが、視覚が観想にいかに役立つかを述べる際、プラトンを名指ししたうえで、『ティマイオス』の議論を大いに参考に行っている点である。アレクサンドロスが参照したのは、『ティマイオス』における次の議論であると考えられる⁹。

……視覚は、我々にとっての最大の利益の原因となっている。……昼と夜、月や年の循環、春分・秋分、夏至・冬至が見られたことによって、一方では数が考え出され、他方では時間の観念と、万有の本性についての探求が人間に与えられたのである。これらのものから、我々はあらゆる種類の哲学を手に入れたのである。……そして、神が我々のために視覚を創出し、与えた理由は以下である。すなわち、我々が天における知性の循環運動を観察し、この循環運動を、それとは同族であるものの、天の乱れなき循環運動に比しては乱れた状態にある我々の思考の回転運動のために役立て、そして、天の循環運動を十分に学ぶことで、自然本性に即した正しい推理計算の仕方を獲得し、全く彷徨することのない神の循環運動を模倣することで、我々のうちの彷徨している回転運動を秩序正しいものとするためである。(47A-C)

この箇所は神が人間に視覚を与えた目的を説明する箇所であり、人間は天体の観察を通じて神的な循環運動を模倣し、思考に秩序を取り戻すことによって「最も善い生」を全うするとされている¹⁰。アレクサンドロスのテキストにおいては、人間は視覚のおかげで天体運動の観察が可能となり、そこから数をはじめとした様々な概念を獲得し、最終的には第一原因を探求するとされている。この議論は、『ティマイオス』の議論と多少の相違点はあれど、同内容と言えよう。(ただし、後述するように魂の循環運動の正常化について言

及はされていない。)

さらにアレクサンドロスは続く箇所では、視覚がいかにして実践に寄与するかも具体的に説明する。

そして、視覚は実践に関しても、我々をある仕方で教え導いてくれる。というのも、実践は個別的な事柄に関するものであり……、そして、個別的な事柄に関する経験に基づいて、知の大部分が生じるからである。すなわち、可感的事物のうちで生じるもの [= 差異] に基づいて、有益なものとは有害なものとはよく観察することによって、一方でこれこれは忌避すべき、有害なものであると述べて、他方でこれこれは選択すべき、有益なものであると述べて、我々はそのようなものに関する考えを普遍的な仕方では把握するのである。以上のことに由来して、我々に将来に関する思案が生じるのである。(11.23-12.1)

ここで注目に値するのは、視覚の観想への寄与に関する議論において、アレクサンドロスはプラトンを参照していたにもかかわらず、視覚の実践への寄与に関する議論においては、プラトンを全く参照していない点である。私はこの論じ方から、アレクサンドロスがアリストテレスの議論のいかなる点を重視したかが読み取れると考える。アレクサンドロスのテキストをさらに吟味する前に、アレクサンドロスの採る立場を明確にするため、以下でプロトレマイオスが行った同様の議論を確認する。

3. プロトレマイオスの見解

プロトレマイオスは様々な分野において後世に多大な影響を及ぼした、アレクサンドロスの同時代人である。以下で、プロトレマイオスが、特定の感覚が「善く生きること」にいかにか寄与するのか、そして「善く生きること」における観想と実践の関係をいかにか捉えていたのかを、アレクサンドロスとの対照軸として概観する。

プロトレマイオスも「生きること」と「善く生きること」の区別について論じている。『規準と主導的部分について』において、プロトレマイオスは魂における主導的部分とは何かを明確にするうえでこの区別を導入する。

我々は「主導的部分」の二つの意味を混同しているため、最も重要な意味に照らして理解することで、両者を明確に区別することが有用である

う。一方においては、それはまさに生きることの源として理解され、他方においては、善く生きることの源として理解される。さらに、一方においては、それは必要やむを得ないものに即して理解され、他方においては、それはより善いものに即して理解される。さて、単に生きることに関わる魂の最も重要な部分は、心臓周辺に位置するものであるのに対して、生きることと善く生きることの両方に関わる魂の最も重要な部分は、脳周辺に位置するものである。(La22.13-19) ¹¹

この箇所は全体としてプラトンの強い影響が伺える。「必要やむを得ないもの」と「より善いもの」を区別する議論は、『ティマイオス』で導入されている¹²。この両者を「生きること」と「善く生きること」のそれぞれに明示的に対応させる議論は『ティマイオス』には見当たらないが、植物的な生が単に「生きること」であるとされており¹³、かつ知的活動は明らかに称揚されていることから、このような対応関係が導入されたと考えられる¹⁴。さらに、「生きること」と「善く生きること」のそれぞれに対応する身体的部分が存在するという議論も『ティマイオス』に見られる¹⁵。

プトレマイオスは「生きること」と「善く生きること」の区別を導入した後、「善く生きること」と特定の感覚との関係について論じる。

もし、善く生きることという目的に向かう〔理性を除いた〕他の手段に二等賞が与えられなければならないならば、……諸感覚に対して与えられるだろうし、もし全ての感覚に対してでないならば、事柄を観想すること、そして、事柄を判断すること(κρίνειν)に最大限に寄与するものに対してのみ、すなわち、視覚と聴覚に対してのみ与えられるだろう。視覚と聴覚は、他の感覚よりも、それ自体頭部・脳の近くに位置しており、かつそれらの特別な関係のゆえに、善く生きることの主要かつ第一の源〔＝理性〕に隣接して位置している。(La23.8-17)

この箇所では、視覚と聴覚が他の感覚よりも「善く生きること」に寄与するとされ、それらが事柄の観想と判断のいずれにも役立つとされている。プトレマイオスが観想的学問と実践的学問を区別するに際して、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の強い影響下にあったことを考慮すると¹⁶、この箇所では観想と並置される「判断」は、『ニコマコス倫理学』で術語的に用いられていた実践的な事柄に関わる「判断」を指す、あるいは、少なくとも包含す

るものであると予想される¹⁷。この予想は、プロトレマイオスにおける観想と実践の関係を確認することで、確かなものとされる。

プロトレマイオスは『アルマゲスト』の冒頭において、観想的学問と実践的学問の区別、そして神学、天文学に代表される数学、自然学というアリストテレス的な観想的学問の区分を引き合いに出したあと、次のように述べる。

天文学的探求はとりわけ、実践においても、性格においても、善美さに関して人々を目利きにし得る。すなわち、神的なものにおいて観想される同一性、秩序正しさ、均整、そして平穏さに基づいて、天文学的探求は一方で探求に従事する人々をこの神的な美を愛する者にし、他方で観想されるものと同様な魂の状態へと、その人々を慣れ親しませ、言わばその自然本性を形作るのである。(1.1, H7, 17-24)

プロトレマイオスは、観想（天文学的探求）を通じて得られた知は、人間の実践にも範型を与えることで寄与するとしており、実践知が観想知に対して依存関係にあることを示している¹⁸。したがって、プロトレマイオスの想定する「善く生きること」とは、単に観想に没頭するのみならず、実践をも伴うような生であると考えられる。プロトレマイオスのこの見解は、古代における天文学と倫理学とを結びつける伝統の上に位置付けられる¹⁹。

以上より、プロトレマイオスが特定の感覚が「善く生きること」に寄与することを認め、「善く生きること」のうちに観想と実践の両方が含まれると想定していること、そして、天体運動を観ることによって得られた知は実践における知の範型でもあるとし、観想知に対する実践知の依存関係を示すことで、「善く生きること」、「観想と実践」そして「感覚」の関係性を説明していることが明らかになった。

4. 実践の個別性の強調

以上のプロトレマイオスの見解は、アレクサンドロスの見解とある点においては接近しており、またある点においては離反している。まず、特定の感覚が「善く生きること」に寄与し、その「善く生きること」のうちに観想と実践の両方が含まれるという点は共通している。さらに、いかにして特定の感覚、特に視覚が観想知の獲得に寄与するかについての見解も、両者『ティマイオス』を参照し、天文学的探求を想定している点で同じである。しかしながら、いかにして視覚が実践知の獲得に寄与するかについての見解において、

両者は全く異なる説明を行っている。

プトレマイオスは、視覚を通じた観想によって実践の範型もまた得られるという、実践知の観想知への依存関係を想定している。これに対して、アレクサンドロスは先の箇所、視覚の観想への寄与と実践への寄与を別々に語っており、そのような依存関係について語ってはいなかった。現代のプラトン研究において、プラトンが『ティマイオス』で観想と実践の両方を含む「最も善い生」を念頭に置いていたかについては立場がわかれるものの²⁰、アレクサンドロスが『ティマイオス』における観想を通じた魂の運動の正常化の議論に触れず、視覚と実践の関係を論じるうえでプラトンに言及しなかった理由は、まさにプトレマイオスが解釈したような仕方で、観想知と実践知を究極的には同一視し、観想を通じて得られた知が実践にとっての普遍的な範型も提供し得るという見解を退けるためであったと考えられる。

事実、アレクサンドロスが視覚と実践の関係を論じる際、「実践は個別的事柄に関するものであり……、そして、個別的事柄に関する経験に基づいて、知の大部分が生じる」と述べ、実践知が個別的事柄を通じて得られる点を強調している。このことは、アレクサンドロスのテキストを、彼が参照したと考えられるアリストテレスのテキストと比較することでさらに明確になる。

……若者が幾何学や数学を身につけ、そのような分野についての知者になることはあるが、思慮ある者になることはないと考えられている。その原因は以下である。すなわち、思慮は個別的事柄にも関わり、個別的事柄は経験より知られるようになるものであるのに、若者はそのような経験がないのである。というのも、経験には多くの時間がかかるからである。(1142a11-16)

実践されるあらゆる事柄は、個別的事柄、すなわち、最終的事柄に属する。……そして、知性は両方向から最終的事柄に属する。……知性は、論証の場面では不動の第一項に属し、実践の場面では他の仕方を許容する最終項、つまり、小前提に属する。すなわち、このような最終項は目的への始点なのである。というのも、[実践の場面では、] 普遍は個別的事柄から到達されるからである。したがって、我々は個別的事柄の感覚を有していなければならない、そのような感覚こそ知性なのである。(1143a32-1143b5)

実践的領域において個別的な事柄に関する経験を重視し、そこから普遍へと到達すると述べている点は、アレクサンドロスのテキストと共通している。ところで、これらテキストには解釈上の難点があることが知られている。まず、二つ目のテキストにおける「知性」の語法は、アリストテレスが術語として用いる「知性」よりも広く、例外的である。さらにこのことに関連して、アリストテレスが想定する「個別的な事柄についての感覚」とは、文字通りの感覚であるのか、比喩的な意味での感覚であり、知性、あるいは知性的なはたらきを指しているのかが議論の対象になっている²¹。しかし、アレクサンドロスの記述はアリストテレスのテキストにおける解釈上の難点が避けられ、単純化されている。すなわち、アレクサンドロスは知性のある種の感覚と重ねることはせず、「個別的な事柄についての感覚」を単に文字通りの感覚として捉えている。

この単純化は、アレクサンドロスが比喩的ではない、文字通りの感覚が個別的な事柄に関わる実践知の獲得に寄与することを説明するために必要な措置であったと考えられる。アリストテレスが術語として用いる「知性」は、普遍的な原理・原則を把握するはたらきであり、個別的な事柄を把握する感覚とは対置されるものである²²。アレクサンドロスが実践においてある種の感覚と重ねられる知性に触れなかったのは、本来的な知性が普遍的な事柄に関わるものであるがゆえに、個別的な事柄に関わる感覚と実践を論じるという彼の議論に混乱をもたらすと考えたからであろう²³。

以上より、アレクサンドロスは視覚と実践の関係を論じるに際して、視覚と観想の関係を論じる際には依拠していたプラトンを参照しないことで、実践知が観想知という普遍的な範型から得られるというプトレマイオスが採った見解を意識的に退けていること、そして、アレクサンドロスはプラトンに代わってアリストテレスのテキストを参照するものの、そのテキストを単純化することで、実践知が個別的な状況から獲得されるという点を重視して議論を展開していることが明らかになった²⁴。

5. 善く生きること

これまでの議論から、第1節でアリストテレスの『感覚と感覚されるものについて』に対して提起した二つの疑問のうち的一方——視覚や聴覚といった特定の感覚が、観想知と実践知という全く異なる種の知のそれぞれの獲得に具体的にいかなる仕方で寄与するのか——に対するアレクサンドロスの見解が明らかにされた。最後に、もう一方の疑問——「善く生きること」にお

ける観想と実践の関係はいかなるものか——に対するアレクサンドロスの見解を考察する。

上述したように、アレクサンドロスはアリストテレスの『感覚と感覚されるものについて』の一節を注釈する際、アリストテレス同様、特定の感覚は観想と実践の両方に役立つため、人間が「善く生きること」、言い換えれば、「幸福」に寄与するとしている。このとき、「善く生きること」のうちに観想と実践の両方が含まれていることは明らかである。しかしながら、アレクサンドロスは実践に対する観想の優越を各所で説いており²⁵、この両者を対等なものとして捉えているとは考えにくい。

アレクサンドロスが「善く生きること」における観想と実践の関係をいかに捉えていたかを考察するために、彼の『魂について』の一節を参照する。アレクサンドロスは、魂の理性的部分の力能が観想的・実践的という二重性を有していると述べた後、次のように述べる。

その力能は、これを有する者が単に生きること²⁶に寄与するのではなく、善く生きことに寄与するのである。……そして、実践的・臆見的知性は最初に生じる。なぜなら、この種の知性の活動は我々にとってより役に立ち、より慣習的に用いられるものであるためである。学知的・観想的知性はこれに続いて生じる。(81.15-21)

この箇所では、魂の理性的部分の観想と実践に関わる力能が「善く生きること」に寄与するとされたあと、実践を司る知性の方が、観想を司る知性よりも時間において先に我々に生じると述べられている。現代の注釈者たちは、アリストテレスはこのようなことを述べておらず、この一節をアレクサンドロスによる補足説明であると考えている²⁷。むしろ、アリストテレスの立場は前節で引用したテキストが示すように、人間は実践よりも先に観想に取り組むことが可能であるとするものである。

しかしながら、アレクサンドロスによるこの一見すると不必要な挿入は、「善く生きること」のうちに観想と実践の両方が含まれるとする『感覚と感覚されるものについて』の見解と、「善く生きること」としての「幸福」について、観想こそが「完全な幸福」であり、実践は「二次的な幸福」であるとする『ニコマコス倫理学』X巻の立場を調停するうえで必要になったと考えられる²⁸。

上記の補足を行う際、アレクサンドロスが参照したと考えられるのは、ア

リストテレスの初期著作である『プロトレプティコス』に見られる以下のような議論である²⁹。ここで重要なのは、『プロトレプティコス』における $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ は、『感覚と感覚されるものについて』における $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ と同様に、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で区別した観想知と実践知の両方を含むものであるということである³⁰。

そこで、もしあらゆるものにおいて、その目的が常により善いとすれば……、そしてもし、自然本性に則した目的が……自然本性に則して進んだ生成に従って最後に達成される目的とするならば、最初にその目的に達するのは身体的部分であり、その後には魂の部分が続き、とにかく、より善い部分の目的は常にその生成よりも後になる。したがって、魂は身体よりも後のものであり、 $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ は魂の中でも最後のものである。というのも、我々は $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ がその自然本性上、最後に人間に生じることを知っているためであり、だからこそ、老人は善いもののうちでこれだけを主張するのである。[81.20-82.2]³¹

この一節は、『感覚と感覚されるものについて』と『ニコマコス倫理学』X巻の記述を整合的に読むための道具立てを与えてくれる。すなわち、人間のうちに時間的により後に生じるものこそが、人間にとってより善い目的であるという主張である。アレクサンドロスは、『「感覚と感覚されるものについて」注解』において、アリストテレスが $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ の名の下に、観想知と実践知をまとめていることを認めていた。しかしながら、アレクサンドロスはアリストテレスが実践に対する観想の優越を説いていたことも認めているため、 $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ の名の下にまとめられた観想知と実践知の間に優越関係を設ける必要があった。そこで必要となる措置こそが、 $\varphi\rho\acute{o}\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ の内部にさらに完成の順序を設けて、名称において統一されている観想知と実践知を分断し、前者を司る知性が後者を司る知性よりも後に完成すると補足することなのである。このことによって、アレクサンドロスはより後に人間のうちに生じる観想こそが人間にとってのより善い目的、すなわち、よりすぐれた仕方ですく生きることであると主張することが可能となるのである。

ここまでの議論から、「善く生きること」における観想と実践の関係はいかなるものであるかという疑問に対する、アレクサンドロスの見解が明らかになった。アレクサンドロスは『「感覚と感覚されるものについて」注解』や『魂について』において、観想と実践の両方を「善く生きること」に含めつつも、

「観想を司る知性の方が実践を司る知性よりも時間的により後に人間のうちに生じる」というアリストテレスには帰されないテーゼを付け加えることによって、実践よりも観想の方がより人間の目的である「善く生きること」、すなわち、「幸福」に相応しいとする『ニコマコス倫理学』X巻におけるアリストテレスの見解を保持し得たのである。

以上より、第1節で提示した二つの疑問に対するアレクサンドロスの見解が明らかになった。アレクサンドロスは、アリストテレスにおける「善く生きること」に関する議論について、アリストテレスに即して整合的読解を試みていた。その試みは、単純化やアリストテレスには帰されないテーゼの付加を伴うものであったものの、その過程で提示された、実践知の個別性を重視するアレクサンドロスの読解は、現代的な観点からも妥当なアリストテレス解釈であると十分言えるだろう。

注

(1) *DA* 434b11-9.

(2) この箇所の *φρόνησις* は、術語としての「思慮」を指すものではなく、観想知と実践知の両方を含む広い知を指す (cf. Ross 1906, 130)。また、アリストテレスは時に人間以外の動物も知的能力を有していると述べているように思われるが (cf. *HA* 611a15-6)、この箇所で想定されているのは人間であろう (cf. Cosenza 2013, 109)。

(3) Cf. *DA* 434b24-5; 435b19-24.

(4) Cf. *EN* 1095a19-20; 1140a25-8.

(5) アリストテレスの『*デ・アニマ*』や生物学的著作における「善く生きること」と、倫理的著作における「幸福」としての「善く生きること」を結びつける議論として、Leunissen 2010, 57-63; 2015, 218-24 を参照。

(6) *EN* 1178a8.

(7) Cf. Sharples 1987, 1179-1181.

(8) 「善く生きること」に寄与する感覚としてアリストテレスが挙げているのは視覚・聴覚・嗅覚であるが、アレクサンドロスが特に視覚に着目して感覚の観想と実践への寄与を論じるため、以下聴覚と嗅覚については触れないこととする。

(9) Cf. Towey 2000, 162, n.162.

(10) *Tim.* 90D-E.

(11) 『規準と主導的部分について』のテキストは Liverpool-Manchester

Seminar on Ancient Greek Philosophy (ed.) 1988 を用いる。

(12) *Tim.* 75D-E.

(13) *Tim.* 77A-C.

(14) 「生きること」と「善く生きること」のそれぞれを、「必要やむを得ないもの」と「最善のもの」のそれぞれに対応させるという議論は、アリストテレスの『プロトレプティコス』には明示的に見られる (cf. *Prtr.* 40.1-11)。藤沢は、『プロトレプティコス』の議論全体に「善いもの」と「必要なもの」の対立を見て取っている (cf. 藤沢 2000 [1973])。

(15) *Tim.* 90A-D; 69E-70E.

(16) Taub 1993, 19-20.

(17) プトレマイオスにおける「見ること」の実践への寄与については、Feke 2018, 75-8 を参照。『ニコマコス倫理学』における κρινεῖν の語法については Fortenbaugh 1964 を参照せよ。さらに、『ニコマコス倫理学』において、有徳な人物の「判断」は事柄を正しく「見ること」と同一視されており (cf. 1113a29-33)、「見ること」と実践的な事柄に関わる判断を結びつける議論はアリストテレスに遡る。

(18) Cf. Feke 2018, 52-78.

(19) Cf. Taub 1993, 146-153.

(20) 『ティマイオス』における「最も善い生」とは純粋な観想のみを行う生であると解する立場としては Sedley 2017、観想と実践の両方を含む生であると解する立場としては Russell 2004; Armstrong 2004 が挙げられる。

(21) 前者の立場として Moss 2012; Rabinoff 2018 が、後者の立場として Morison 2020 が挙げられる。

(22) Cf. *EN* 1142a25.

(23) アリストテレスのテキストにおける「個別的な事柄についての感覚」を、アレクサンドロスが実際に文字通りの感覚として解していたかは明らかではない。アレクサンドロスに帰される『倫理学問題集』(cf. 161.14-29) では、感覚としての視覚と、実践における判断と選択を担う視覚とが区別されて論じられているが、後者が文字通りの視覚に対する言及であるのか、視覚に喩えられる知性的なはたらきに対する言及であるのかは定かではない。

(24) 実践知は観想知に依存するという見解をアリストテレスに帰することへの問題意識は、現代のアリストテレス研究にも通じる (cf. Whiting 2002; 中畑 2010)。

(25) Cf. esp. *in Metaph.* 2, 138.26-149.13.

(26) ここで「生きること／善く生きること」と訳したのは、εἶναι／εὖ εἶναι

である。Wisnovsky は、この区別自体はアリストテレスの著作に見出されず、アレクサンドロスが導入した区別であると指摘する (Wisnovsky 2003, 72-3, n.22. cf. Dooley 1993, 12, n.5)。しかしながら、『プロトレプティコス』には ζῆν と εἶναι を互換的に用いて、「生きること」にも程度があることを論じる箇所があり (cf. 57.23-58.14)、εἶναι / εὖ εἶναι という区別に ζῆν / εὖ ζῆν という区別と異なる含意があるとは考えられない。

(27) Cf. Donini 1996, 271; Bergeron & Dufour 2008, 335-6.

(28) アレクサンドロスの『魂について』は、アリストテレスの『デ・アニマ』のみならず、『ニコマコス倫理学』も参照してアリストテレスの魂論を論じる。特に、『デ・アニマ』には見出されない魂の理性的／非理性的部分という分割を論じる際には、『ニコマコス倫理学』が大いに参照される (cf. Bergeron & Dufour 2008, 49)。本文で引用した箇所もこの分割について論じる文脈に属しており、この箇所で観想と実践を含む「善く生きること」が論じられる際にも、『ニコマコス倫理学』における観想と実践の関係性が念頭に置かれていたと考えるのは自然だろう。

(29) 人間における観想知と実践知の完成の時間的順序について『プロトレプティコス』を参照する合理的な理由は、「人間は観想と実践のそれぞれを人生のどの段階で学ぶべきか」が『プロトレプティコス』における論点の一つであると考えられるためである。『プロトレプティコス』はイソクラテスによる『アンティドシス』のアカデメイア批判に應えるために書かれたと推定されており (cf. Hutchinson & Johnson 2010)、『アンティドシス』においてイソクラテスが、幾何学や天文学の知は若者の思考の訓練としての効果は認めるものの、あくまでもその後の実践のための準備に過ぎないと主張していたのに対し (cf. *Antid.* 266-8)、『プロトレプティコス』においてアリストテレスは、観想に必要な φρόνησις の完成は時間において後であり (cf. 81.20-82.2)、かつ φρόνησις が実践にも寄与すると主張することで (cf. 86.5-7)、イソクラテスの考えを退けている。

(30) Cf. Jaeger 1923, 241-57.

(31) 『プロトレプティコス』のテキストで、イアンブリコス『哲学のすすめ』に基づく部分は *Des Places* を用いる。

文献表

Armstrong, J. M., 'After the Ascent: Plato on Becoming like God', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 26, 2004, 171-183.

- Bergeron, M. & Dufour, R., *Alexandre d'Aphrodise: De l'âme*, Paris, 2008.
- Cosenza, P., *Aristotele: Parva Naturalia Tomo II*, Napoli, 2013.
- Des Places, É., *Jamblique: Protreptique*, Paris, 1989.
- Donini, P., *Alessandro di Afrodisia: L'anima*, Bari, 1996.
- Dooley, W., *Alexander of Aphrodisias: On Aristotle's Metaphysics Book 1*, London, 1989.
- Feke, J., *Ptolemy's Philosophy: Mathematics as a Way of Life*, Oxford, 2018.
- Fortenbaugh, W. W., 'Aristotle's Conception of Moral Virtue and Its Perceptive Role', *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 95, 1964, 77-87.
- Hutchinson, D. S. & Johnson, M. R., *The Antidosis of Isocrates and Aristotle's Protrepticus* (the version of 2010 February 20), 2010 [retrieved December 2022].
<http://www.protrepticus.info/antidosisprotrepticus.pdf>
- Jaeger, W. *Aristoteles Grundlegung Einer Geschichte Seiner Entwicklung*, Leipzig, 1923.
- Leunissen, M., *Explanation and Teleology in Aristotle's Science of Nature*, Cambridge, 2010.
- Leunissen, M., 'Aristotle on knowing natural science for the sake of living well' in Henry, D. & Nielsen, K. M. (eds.), *Bridging the Gap between Aristotle's Science and Ethics*, Cambridge, 2015, 214-231.
- Liverpool-Manchester Seminar on Ancient Greek Philosophy (ed.), 'Ptolemaeus: on the Kriterion and Hegemonikon', in Huby, P. & Neal, G. (eds.), *The Criterion of Truth: Essays Written in Honour of George Kerferd Together With A Text and Translation (with Annotations) of Ptolemy's on The Kriterion And Hegemonikon*, Liverpool, 1989, 179-230.
- Morison, B., 'Practical Nous in the Nicomachean Ethics', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 57, 2020, 219-48.
- Moss, J., *Aristotle on the Apparent Good: Perception, Phantasia, Thought, and Desire*, Oxford, 2012.
- Rabinoff, E., *Perception in Aristotle's Ethics*, Evanston, 2018.
- Ross, G. R. T., *Aristotle: De Sensu and De Memoria*, Cambridge, 1906.
- Russell, D. C., 'Virtue as "Likeness to God" in Plato and Seneca', *Journal*

- of the History of Philosophy* 42, 2004, 241-260.
- Sedley, D., 'Becoming Godlike' in Bobonich, C. (ed.), *The Cambridge Companion to Ancient Ethics*, Cambridge, 2017, 319-337.
- Sharples, R. W., 'Alexander of Aphrodisias: Scholasticism and Innovation', in W. Haase & H. Temporini (eds.), *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* II, 36.2: *Philosophie, Wissenschaften, Technik. Philosophie*, Berlin, 1987, 1176-1243.
- Taub, L. C., *Ptolemy's Universe: The Natural Philosophical and Ethical Foundations of Ptolemy's Astronomy*, Chicago, 1993.
- Towey, A., *Alexander of Aphrodisias: on Aristotle's on Sense Perception*, London, 2000.
- Whiting, J., 'Strong Dialectic, Neurathian Reflection, and the Ascent of Desire: Irwin and McDowell on Aristotle's Methods of Ethics', *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 17, 2001, 61-116.
- Wisnovsky, R., *Avicenna's Metaphysics in Context*, New York, 2013.
- 中畑正志「アリストテレスの言い分 倫理的な知のあり方をめぐって」
『Methodos 古代哲学研究』(42)、2010、1-30
- 藤澤令夫「観ること（テオーリアー）と為すこと（プラークシス） イソクラテス、プラトン、そしてアリストテレスの初期と後期」『藤澤令夫著作集 II』岩波書店、2000、223-252（『西洋古典学研究』(21)、1973、1-19）